

令和8年2月14日(土)

お早う御座居ます。皆様の元氣そうなお顔を見ることが出来、大変嬉しく思います。

中齋塾フォーラムが発足してから20年という節目を迎えるにあたり、来年20周年の記念式典を開催しようと、現在、岡本理事長が様々な構想を練って下さっています。どうぞ宜敷くお願い致します。

また、本日は真向法の佐藤会長もお見えになっています。

では論語解説に入ります。今日コアさんが選ばれた章句は、とても良いものだと思います。

①述而第七【3】

し いわ とく おさ がく こう ぎ き うつ あた
子曰く、徳の修まらざる、学の講ぜざる、義を聞いて従ること能わざる、
ふ ぜん あらた あた こ わ うれい
不善 改むること能わざる、是れ吾が憂なり。

②憲問第十四【25】

し いわ いにしえ がくしゃ おのれ ため いま がくしゃ ひと ため
子曰く、古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす。

「古の学者は己の為にし」を解説します。昔の学者は自分の修養の為、自分自身を高める為に学んでいた、ということです。自らを磨く為の学びであったと理解しましょう。

それに対して「今の学者は人の為にす」とは、今の学者は人に知られる為、名声を得る為に勉強している、という意味になります。これはなかなか痛烈な指摘だと思います。

おそらくコアさんも、こうした意味を考えながらこの言葉を選ばれたのではないかと思います。色々な解説書がありますので、それらを読んで参考に

されたのかもしれませんが。そうであれば、とても良い選び方だと思います。この言葉を自分自身に置き換えるのは大変なことです。

私は、石川梅次郎という先生から論語を教わりました。先生のご自宅に伺い、論語の講釈を聞きながら、様々な事を教えて戴いたのです。先生は、古の学者とはこういう方だと思わせるような人物でした。

石川梅次郎先生のご自宅を訪ねた際、窓に鉄格子がはめられているので、これはどうしてですかとお聞きしました。すると、昔 B29 が飛んできたことがあって、その時防御の為につけたもので、その頃のものをそのままずっと残していると説明して下さいました。

六畳程の部屋の真ん中に炬燵が置かれていて、先生はその炬燵に足を入れながら、いつも勉強しておられました。そして四方の壁には、和綴じの本が天井までぎっしりと積んでありました。

先生は「君の後ろの上から何番目にある本を、ちょっと取ってくれないか。こういう本があるはずだから」と言われたので探すと、すぐ見つかりました。梅次郎先生は本の場所や内容を、全て頭の中で把握しておられるのだと思いました。先生は当時、七十代後半だったと思います。

中斎塾フォーラムは、私が 60 歳の誕生日の時に発足させました。石川梅次郎先生が「還暦は社会に恩返しをする年代に入ると思いなさい」と言われた事を思い出します。その言葉が中斎塾フォーラムを発足させる大きな動機になりました。

そう考えると、己の修養の為に学ぶ、つまり自分自身を磨くということは、何を見ても、どのようなことをしていても、全て自分を磨くことに繋がっていると思います。ですから、何か読んだり、誰かの話を聞いたりした際も、これは自分自身を磨く為のものと考えることが大切です。

そのことに関連してよく使われる言葉に切磋琢磨があります。自分自身を磨く事に直結するとても大切な言葉です。

今の学者は、人の為というより自分の為に動いている人が多いと感じます。ここでは「今の学者」と書かれていますが、今日の新聞を見てみると、朝日、日経、読売のどれも同じような題材をトップに載せています。中道の小川さんについての記事がありましたが、政治家の顔を見て立派だなと惚れ惚れする人は、あまり見当たりません。それは心を磨いていないからではないでしょうか。

政治家は名前を知られなければ当選できません。ですから必死になって、当選するために自分の名前を知ってもらおうと、様々な活動を一生懸命行っています。

少し余談になりますが、20周年という節目にあたり、論語を読むと「仁」が一番大切であると多くの本に書かれています。私は以前、仁よりも「術」のほうが大切ではないかと思っていました。中斎塾フォーラム参加の中里麦外先生と色々議論をするうちに、仁と術の二つを並べて考えても良いのではないか、と思うようになりました。

孔子は「述べて作らず」と言いました。それは自分で新しく作り出すのではなく、先人達の素晴らしいと感じる教えを受け継ぎ、それをしっかりと後世に伝えていく、ということです。自分が考えた事を思想として広めていくことではありません。

先人達が考え、研究してきた多くの中から、良いと思うものを取捨選択し、それをきちんと後の世代に伝える。それが自分の仕事であり、最大の役目である。孔子はそのように言っていると思います。

真向法について、私も学び始めて少し時間が経ちました。真向法の事をご本尊の前で申し上げるのは少し恐れ多い気もしますが、私はこのように受け止めています。

真向法創始者の方は、半身不随になり、体が思うように動かなくなったそうです。そこで必死に仏典を読み込み、自分を磨こうとされたのだと伺っています。これで救われると最初から思った訳ではないでしょう。仏典を何度も何度も読み込むうちに「内拝」にたどり着き、その内拝を一生懸命続けていく中で、真向法が生まれたのだと私は理解しています。

そう考えると、真向法は創始者である長井先生が考え出されたものですが、その後受け継いできた先生方が、しっかりと原点を守りながらバトンを渡してきたことになります。時には、なぜ真向法が生まれたのかと原点に立ち返ることも必要でしょう。その上で其々が工夫を重ね、さらに磨き上げて後世の人達へ伝えていく、それが大切だと思います。

そうした積み重ねがあるからこそ、6年後には100周年を迎えます。皆様お元気ですから、渋谷の真向法協会に行かれて、こういうことをやっているのだなと体験されると良いと思います。真向法は100周年。中斎塾は20周年ですが、まだまだこれからです。

そう考えますと、述而を選ばれたのは大変良い事だと思います。述べて作るのではなく、学んだ事を自分の頭の中に刻みこんでいくことになるからです。

「徳の修まらざる」ですが、これはなかなか難しいものです。徳を全うする事は、自分自身の中に多くの私欲があるからです。

竹岡さんとお話をする、私欲があまりないようにも見えます。しかし私欲が全く無ければ、あれだけ多くの事を動かすエネルギーが湧いてくることもないのでは、という氣もいたしますので、世の為になる事をまずやろうと思って行動しておられるのだと思います。

同時に、ご自身の為になることも一緒に考えておられるのではないかと思います。中には、竹岡さんを批判する人もいるかもしれませんが、批判をさらりと受け流してしまえるような修養が大切だと思います。批判や批評が出ないようにするよりも、そうしたものに動じない修養の仕方が良いのではないのでしょうか。

「徳の修まらざる」

これは、私欲に打ち勝って徳を全うすることですが、なかなか難しいものです。

「学の講ぜざる」

学問について、さらに研究していくこと。別の言い方をすれば、道理を明らかにすることです。自分が勉強している学問について、まだ勉強が足りないと感じることこそ大切だと思います。

酒井さんは、恐らく自分はまだ勉強が足りないと感じているからこそ、あれだけ色々調べておられるのではないかと思います。余計なことかもしれませんが、それだけ一生懸命に学ぼうとされている。これは何なのだろうとずっと追求し、追求し尽くしていく。その姿勢はとても良いことだと思っています。

「義を聞きて従ること能わざる」

義は、善いこと、素晴らしい。正しい事を聞いても、それに従って行動できないという意味で、誰にでもある事だと思います。

私自身も、会社を作ったばかりの頃、こういうことが非常に多くありまし

た。周りの人から忠告を戴いても、なかなか素直に納得できないのです。ああだこうだ理屈を言って、せつかく忠告して下さった事が、素直に自分の中に入ってこない事がありました。

最近、学生時代の友人と話す機会が多くなりましたが、「今のあなたは怖くないから色々言えるけれど、学生時代は近寄り難かった」と言われることがあります。話を聞いてみると、何を言われるか、何をされるかわからないから、なるべく側に寄らないようにしていたと言うのです。

私自身忠告をされても、なかなか素直に受け入れることができなかつたのでしょう。

「不善 改むること能わざる」

これは、おそらく誰にでも当てはまることではないでしょうか。間違っている、それを中々改めることが出来ないということです。自分でも間違いだと思ひ、何とかしなければならぬと感じていても、実際は改めることができない。

この言葉の解釈については、いくつか考え方があります。一つは、孔子が自分自身を振り返って、「私はこういうことが中々できない。困ったものだ」と、自分のことを言っている解釈です。

もう一つは、孔子が弟子達の様子を見て、「この人はここが駄目、あれが駄目。だから困ったものだ」と言っているのではないか、という考え方です。

どちらの解釈を取っても良いですし、自分に合うものを選べば良いでしょう。

私は、後者ではないかと考えています。この人はここが少し問題だから、ここを直してあげればもっと良くなるのに、という気持ちで、弟子達を導き、教えていたのではないか、そのように受け取っています。

「是れ吾が憂なり」

これは、弟子たちに一生懸命教えているけれども、なかなか思うようにはいかないものだ、という意味です。

今はたまたま論語ということで、私がこちら側でお話ししていますが、例えば酒井さんが前に出てご自身の専門分野についてお話されれば、皆さんきっと一所懸命に聞かれると思います。谷口さんが前に出てきてお話しされても、やはり皆さん熱心に聞かれることでしょう。

ここにおられる皆さんは、其々専門分野を持っておられる方ばかりです。

ですから、たとえば志村さんにお話をお願いしたら、おそらく時間内では終わらないのではないのでしょうか。色々なお話が、沢山出てくると思います。

<今の時代に置き換えて考えてみる>

今は、電車に乗って新聞を読む人は殆どいません。皆見ているのはスマホです。いずれ気づくことになると思いますが、スマホを見ながら操作していると、首がどんどん下に落ちてきます。

私の知り合いの同級生の話ですが、桜の花見に行った時、久しぶりに再会しました。元気かいと声をかけていましたが、1年後会った時、首が前へ極端に曲がってしまっていて驚きました。首が曲がり始めると、進むのは本当に早いものです。

昨日、大井町の友人と話をしたのですが、最近少し前かがみになり始めていると言うのです。そこで、前に曲がらないようにするにはどうしたらいいんだろうと話になりました。

色々話しているうちに、呼吸法を教えてくださいと言われたものですから、呼吸法を教えることになりました。首が曲がってくると言うので、曲がらないようにするには、腹式呼吸が良いとやり方を説明しました。

今の時代に置き換えて考えてみると、新聞よりも、YouTube やスマホを使う人が圧倒的に多く、その世界に入ってしまうとどんどん首が曲がっていくようで、怖いなと思います。

スマホは時間もどんどん取られますし、ずっとスマホ漬けになりがちです。今は皆さんまだ大丈夫かもしれません。

政治家は本来、きちんと学ぶ責任があります。しかし、その政治を監視し社会に警鐘を鳴らす筈のメディアが、最近はその役割をあまり果たしていないように感じます。昔はそれを強く批判していましたが、今は言い方もずいぶん穏やかになってしまいました。そもそも、この問題を真剣に考えている人自体があまり多くないと思います。

今日の朝日、読売、日経ですが、一面には皆同じようなことが、順番を変えて載っているだけです。痛烈な批判や明確な見解はあまり載っていないように感じました。

その中で、少し氣になったのが、谷口さんが話していたバレンタインの話です。朝日新聞のコラムに掲載されていた記事を見たら、バレンタインの2月14日は「煮干しの日」だそうです。

天声人語に書かれていたのですが、こうした表現は日常で本当に使われるのだろうかとの疑問に思います。2月14日の「2」はそのまま、「1」は棒と見立て、「4」を「し」と読んで「煮干し」とするなど、やや無理にこじつけている印象を受けました。最近、今日は何の日等色々あり、無理やり作った感じがしますが、これはバレンタインと煮干しを並べて紹介しているのが面白いと思いました。

今朝の新聞で不思議に思った事は、税金や医療費について、もっと思い切って手を入れていかなければいけない、という話が出ていたことです。

特に税金については、高額所得者は負担が少なすぎるからもっと税負担をしてもらおうべきだという意見がよく出てきます。こういうことを言われると、高額所得者側は中々反論しません。そんなに沢山貰っているのかと言われてしまうので、反論し難いのです。

しかし、私の記憶では、この問題についてこんな話がありました。松下幸之助さんと税務署の人の会話だったと思いますが、いくら働いても、いくら稼いでも、税金で9割も取られたら働く気がなくなるという内容の話でした。これは確かにその通りだと思います。9割も取られたら、たまったものではありません。

今日本の税金は、かなり高い負担になっていると思います。これは何度も言っていますが、江戸時代には「五公五民」、つまり収穫の半分を年貢として納めるようになると、農民がむしろ旗を立て反発したという話があります。

もし五公五民で反発が起きるのだとしたら、今の税金はどうなのでしょう。税務署の説明や新聞等を見ると、所得税は高所得者で45%、住民税が10%で、合わせて55%だと書かれています。本当にそれだけでしょうか。

その他にも様々な税金がありますし、実際にはもっと多くの負担をしている気がします。税金のあり方を、もう一度きちんと考える必要があるのではないのでしょうか。税金とはそもそもどういうものなのか、どのように負担するのが理想的なのか、どのような税制がよいのか。そういうことを本気で調べ、議論しなければいけない時代なのだろうと思います。

普通の中小企業や中小零細企業も、次々潰れているのが現状です。自営業の方も、インボイス制度あたりから、次々と廃業に追い込まれてきました。

こうした状況を見て困ったものだと思っていると、雇っている人の給料を上げられない会社は退場して戴くのがよいでしょう、と昨年大企業が大きな声を上げました。

確かに一理あります。給料を上げられない会社は整理されるべきだという考え方も理解できます。それに対する反論や議論がもっと出てきてもよい筈なのに、中々出てきません。

私は今年の状態を、乱高下の年だと思っています。それも、ジェットコースターのような乱高下です。利益を上げる人は物凄い勢いで上がっていき、損をする人は物凄い勢いで落ちていく、そういう年だと思っています。

私は今年、為替の動きが気になっています。為替から始まり、株価も同じように乱高下するのではないかと予想しています。こうした乱れに拍車をかけるのは、人災が続く中で自然災害が起きた時でしょう。自然災害が起これば、大きな影響が出ます。思い出すのは、アメリカで9.11のテロに遭った方が、日本に帰国したら3.11の震災に遭ったという話です。本当にお気の毒なことだと思います。

こうしたことを考えると、今年大きな自然災害が起こる可能性は十分にあるでしょう。その為の準備は前もってしっかりしておくことが大切だと、私は常に申し上げています。

そこで、これは提案です。1か月位は災害がきても大丈夫と思っている場合、家にある備蓄を全て出して、この備蓄だけで1か月生活してみようと試してみませんか。その間は外食をせず、新しく食べ物を買わず、今あるものだけで生活してみます。そうすると、本当に1か月持つかどうか分かる筈です。

私もこのようにお話ししている以上、自分でも実際にやってみなければいけないと思っていますので、試してみるつもりです。今年は皆さんに、備蓄はどれ位あるか、1か月分で実際にやってみたらどうだったか、時々お聞きしたいと思います。実際にやってみた方には、ぜひ体験談をお話戴けたらと思います。こうしたことを実際に体験してみることが大切です。

災害が起きると、電気、水道、ガスといったライフラインの問題もあります。実際には、電気が止まったり、ガスが使えなくなったりすることは十分

に起こり得ます。

多くの人は、エネルギーは当然いつでも使えるものだという前提で生活しています。ですが、実際に1か月間、備蓄だけで生活してみると、これが足りない、あれも足りないといった問題が沢山出てくる筈です。

東日本大震災の時、仙台にあったシムックスの営業所や支社は、津波の被害を受けて大変な状況になりました。津波に流された際、海の中に投げ出された社員が、電柱のようなものに必死にしがみつき、流されないように耐えて、なんとか助かったという話もありました。

その後、津波が引いて状況が少し落ち着いた時、現地で一番切実に求められていたのは、赤ちゃん用のミルクでした。赤ちゃんのミルクがないので、すぐに送って欲しいと連絡が入ったのです。現場からは次々と不足している物の要望が届きます。そこで、赤ちゃん用のミルクやおむつ等を必死に集めました。この時集めた物資は、手分けして買ったもの以外に、会社に用意してあったものや、社員其々の家庭からも持ち寄ってもらいました。そうして集めたものを仙台や福島、郡山等へ運びました。

しかし、今度はガソリンが不足していて、車が動かないという問題が起きました。そこで、ドラム缶にガソリンを入れて運ぶことにしました。本来はそのような運び方は認められていませんが、非常時でしたので対応せざるを得ませんでした。

まず警察に行き、緊急物資を運搬する車両である証明をもらいました。そして、シムックスの大きめの車に「緊急物資運搬車両」という表示を大きく貼り付けて運搬しました。通常であればこのような運び方は出来ないのですが、当時はそれほど切迫した状況だったのです。

とんでもないことが起きたときには、こちらも普通ではない対応をしなければ、生き延びることができません。

実際に仙台では、大変な思いをされた方がいて、例えば地震が起きた時、仙台駅から長く続く歩道橋を歩いている最中に大きく揺れを感じた方がいました。その体験が強いトラウマとなり、その後は歩道橋を渡ることができなくなってしまったのです。

歩道橋を渡る時、手すりにつかまってしゃがみ込んでしまいます。どうしても歩道橋を渡らなければならない時は、手すりにつかまりながら座った状態で、少しずつ体を動かして進んでいくほどでした。現在は、そこまでしなくても歩道橋を渡れるようになったそうですが、当時はそれほどまでの状況

でした。

今年もまた、普通ではない状況がいくつか起こる気がしています。

恒例の質問

恒例の質問に参ります。

- 良い日が今年が続いておられる方
- 嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方
- 有難うと言いつけているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入れをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

哲学者の考えでは、物事を突き詰めていくと、客観はやがて主観に行き着き、主観もまた突き詰めていくと客観に行き着くと言います。つまり、主観と客観は本質的には同じものだという考え方です。これは哲学者の木内信胤先生が語っていたことです。

私は木内先生の前に立つと、自然と背筋が伸びました。木内先生の講演会では「先生、カバンをお持ちします」と、普段そのようなことをしない私でもそうした行動を自然にってしまうほど、先生には人格の力がありました。これまで多くの先生から教えを受けましたが、人格的に心から尊敬し、惚れ込んだ方は木内信胤先生ただ一人です。

人生の中で、「この先生は本当にすごい」と心から尊敬できる人に一人でも出会えたなら、それだけで素晴らしいことだと思います。その先生が亡くなられたとしても、その教えや人格の価値が変わることはありません。

高市早苗さんがこれからどのような方向に進んでいくのかは分かりません。ただ、先ほど竹岡さんと話していて、政治家として良い人を見分ける基準はないのだろうかという話題になりました。そこで出てきたのが、オーラを感じる人は良い、オーラが出ていない人は駄目という考え方です。

例えば、中村天風先生の本を読んだり、実際に天風先生に会った方の話を聞くと、先生からオーラを感じた人がかなり多くいます。

天風先生の著作によると、人間のオーラは8つの層に分かれているそうです。人の体の周りに、お蚕さんが繭を作るように、1つ、2つ、3つ、4つと重なり、全部で8つあるとされています。

ただ、私にはそれが見えません。以前、友人の中に1つだけなら見えると言っていた人がいました。その人の話では、ある時自分が癌を患ったとき、砂浜で体を砂に埋めてもらったら、癌のある部分にハエが集まってきたのだそうです。ハエは私の癌を察知して寄ってくるんだねと言っていました。また、その人自身はオーラが暗褐色のような色で見えるそうです。場合によっては橙色だったり、黄色だったりすることもあると話していました。

天風先生の本にも、様々な色のオーラについて書かれています。そういう話を聞くと、私も1つくらいは見てみたいと思います。ですから、天風先生が修行されたような内容を実際に修行すれば、少しは見えるようになるのかもしれない。

テーマ「令和8年を考える」

これからの時代、特に今年は何か起きるのではないかと考えることがあります。その背景として、60年周期や80年周期、100年周期といった歴史的な流れがあります。こうした周期については、多くの研究者が其々の視点で分析しています。

中でも一つ確かなのは、昭和21年2月17日に起きた出来事です。過去の出来事に似たことが再び起こる可能性を意識し、自分自身を磨き、備えておくことが大切です。特に、1か月分の備蓄を実際に試してみることは有効だと思います。

実際に行動し、準備をしているかどうかによって、話の信憑性は大きく変わります。口で言うだけの場合と、実際に行動している場合では、説得力に大きな差が生まれます。

シムックスでは昨年フレコンバッグを活用してジャガイモの栽培を行い、かなりの収穫がありました。ただ、単にたくさん収穫できれば良いという訳ではなく、その品質、美味しいかどうか也非常に重要です。美味しくないので大量に収穫しても意味がありません。

その為今年、フレコンバッグでどれだけ収穫できたのか、味や品質がどうだったのかを、会社全体としてしっかり検証していく予定です。併せて、家庭菜園も新たにスタートさせる計画です。

社員の方々には、15年程前から、将来的に給料をお金で支払う時代から、食べ物を給料の代わりとして渡す時代が来るかもしれないと伝えてきました。それだけでは足りない可能性があるので、自分でも食べ物を作る力を身につけて欲しいとも話していました。

しかし当時は、そんなことが起きるはずがない、お金はこれからもずっとあると考える人が殆どでした。それが10年程前になると、もしかしたらそういうこともあり得るかもしれない、と少しずつ受け止め方が変わってきたように感じます。

最近では、お金そのものを使わない時代は既に来た、それが今の常識ではないですか、といった考えを話す社員も増えてきました。時代の変化に対する認識が、以前とは大きく変わってきていると感じます。

このような将来の話は、あまりに早い段階で伝えすぎると受け入れられ難いものです。2、3年先のことであれば現実味を持って受け止められやすいですが、10年や15年先の話になると、少し極端ではないかと思われてしまうようです。

令和8年ということで、もう少し「丙午」に関する話題が出てくるかと思っておりましたが、実際にはそれほど見かけません。

丙午の年については、年配の方には良く知られているかもしれませんが、「この年に生まれた女性は結婚すると夫を食い殺す」という迷信が、中国から日本に伝わり、江戸時代以降も長く残ってきました。最近では、こうした内容をそのまま率直に説明しても良いのではないかと思ひ、「夫を食い殺すという迷信」とはっきり表現するようにしています。

ただ、当初はそのように直接的な言い方ではなく、「丙午の女性は非常に気が強く、大きな力を発揮する、優れた女性が多く生まれる年です」といった、やや柔らかい表現を用いていました。同じ内容でも、言い方を少し変えるだけで受ける印象は大きく異なります。どちらの伝え方がよいのか、いまだに考えさせられるところです。

先程の続きですが、竹岡さんとお話した際、「顔色が良く、この政治家はいいと思えるような人物は誰か」と尋ねられました。その時私は、高市早苗さんの名前を挙げました。総理大臣に就任される前はそれほど強い印象はなかったのですが、就任された瞬間のあの鋭い目つき、今にも人に食いつきそうな迫力ある眼差しは非常に印象的で、これはいい、と感じました。そこに

は強いオーラと、内側から溢れ出るようなエネルギーが感じられたのです。

丙午の方は元々パワーがあるとされていますので、エネルギーに満ちているという前向きな表現の方が、やはり良い印象を与えるのではないのでしょうか。その意味でも、高市さんのような例を思い浮かべながら丙午を捉えると、理解しやすいと思います。

周囲で「私は丙午です」と言う方がいらした場合には、「良い年回りに生まれましたね」と声を掛けると大変結構だと思います。

安岡正篤先生の著書『干支の活学』では、「丙」は陽の氣、すなわち太陽のようなエネルギーが発展した状態を表しており、氣が満ちて大きな力を発揮することを意味します。一方で、エネルギーが頂点に達した後は、やがて陰りに向かうとも説かれています。

つまり、強いパワーを持ち大きく発展できる一方で、頂点に達したと感じた時には、その後を見据えて穏やかに下りていく工夫も必要になる、ということ。このような意味合いが「丙」という字には含まれているのです。

それから「午」は、物事を前に進めていく過程では、必ず自分に対する反対勢力が現れます。その反対の動きが出てきた時には、それを否定したり押さえ込もうとするのではなく、まずは素直に受け止める姿勢が大切です。

反対勢力を排除するのではなく、できる限り共存共栄の道を探るという見方を持つことが重要になります。バランスを取りながら進んでいかないと、奈落の底に落ちてしまう可能性もある。このように捉えればよいでしょう。

さて、昭和21年2月17日の新聞一面についてですが、日本経済新聞・朝日新聞・毎日新聞の見出しを整理すると、「金融緊急措置」「預金封鎖」

「財産調査」など、非常に強い内容が並んでいます。ただ、見出しだけでは情報が足りない為、他紙の内容も補って全体像を見ていく必要があります。

特に重要なのは「けふから預金封鎖」という点です。これは金融緊急措置令を即日施行し、しかも日曜日に発表することで、預金の引き出しを実質的に不可能にしたものです。さらに、3月3日には臨時財産調査令による資産把握が行われ、手元の現金も含めてすべて把握される仕組みになっていました。

結果として、旧円は使えなくなり、新円への切り替えのためには銀行に預ける必要がある為、国民の資金を銀行に集中させる意図が明確に見て取れます。

ここで私たちが押さえておくべきは、何か兆しが出てきたと感じた時に、自分なりに考えた対応策をすぐに実行する必要がある点です。例えば、タンス預金が危険だと判断した場合、ためらわずに銀行へ移す行動が求められます。

当時の財産調査や金融緊急措置令は、福田赳夫、佐藤栄作、木内信胤を含む少数の関係者が密室で協議し、短期間で一気に作り上げたものとされています。その発端は、資金を持つ人々が食料を買い占めてしまう状況をどう防ぐかという問題意識でした。

これが林野庁から提起され、警察や他省庁へと話が広がり、制度設計が進められました。そして、関係者による集中的な議論を経て、金融緊急措置令が成立したのです。

この経緯については、日本経済新聞の「私の履歴書」にも詳しく記されていますので、調べてみると理解が深まるでしょう。

このような話を踏まえますと、私たちがまず考えるべきなのは、自分の財産がどの程度あるのかを正確に把握することです。現金はいくらあるのか、それが銀行に預けられているのかどうか、といった点を整理しておく必要があります。

銀行に預ける場合でも、1,000万円までという預金保護の枠組みがありますので、多くの資産をお持ちの方は、複数の銀行に分けて預ける工夫が求められます。仮に銀行が破綻した場合、保証されるのは一定額までですから、それ以上の部分については失われる可能性もあるという前提で考えておくことが重要です。

また、国内の資産が不安であれば海外に分散する考え方もありますが、実際に海外の銀行口座を開設・維持するのは手続きや費用の面で負担が大きく、決して簡単ではありません。

私がオーストラリアに滞在した際に現地の銀行口座を開設したところ、保管料の請求が頻繁にあったので面倒に感じ、最終的には口座の利用をやめてしまいました。

こうした手間はあるものの、資産を守るという観点からは無視できない選択肢でもあります。したがって、ある程度の資産をお持ちの方は、その一部を海外に移す必要があるかどうかについて、真剣に検討することが必要です。

ご自身の人脈や繋がりを辿りながら、備えを考えていくことが重要です。中でも最も肝心なのは、食糧を自分で確保できる環境を持つことです。これ

が何よりも重要な基盤となります。

その上で、食糧と交換できる手段として、現金や貴金属、あるいは外国通貨といった資産を持つておくことも有効だと思います。こうした状況が年内に起こる可能性もゼロではないと考えられるため、普段あまり言わないようなことまで、あえてお話しています。

昭和 21 年 2 月 17 日を調べて戴くと分かりますが、この時期には財産に関する厳しい統制が行われ、多くの人の資産が制限されました。例えば給与についても、当時は世帯主で月 500 円までと制限され、家族が 1 人増えるごとに 100 円を上乗せして引き出すことが認められていました。本来は自分のお金であるにもかかわらず、銀行側が引き出してもよいと許可する形になっていた点は、不自然に感じられます。

さらに、臨時の財産調査も実施されました。国民の資産状況を把握する為、昭和 21 年 3 月 3 日午前 0 時から調査を行うと事前に発表されています。このような歴史的事例からも、資産管理については慎重に考える必要があると言えるでしょう。

高市早苗さんについても触れておきます。高市さんが行っている政策で今後インフレがさらに加速する可能性が強くなりました。物価上昇のスピードが一段と速まることも想定されます。

加えて、為替の変動も大きくなる可能性があります。既に多少の変動は見られますが、現時点での動きは、まだ本格的な乱高下とは言えません。

今後は株式市場も為替も、ジェットコースターのように大きな値動きになる可能性があります。注意が必要です。このような状況は望ましいものではありませんが、現実的なリスクとして認識しておくべきでしょう。

日々のニュースや見出しを注意深く読み解くことで、今後の動きをある程度予測することも可能になります。ご自身でこうなるのではないかと考えたことがあれば、発表して戴いて、意見を交換しながら判断していくことが重要です。一人で考え込むと視野が狭くなりがちですので、情報は積極的に共有していくことが望ましいでしょう。

本日は以上と致します。有難う御座いました。